

令和7年6月21日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム
令和7年度 第6回

おはようございます。開会のご挨拶を聞きながら、ふと頭に浮かんだことがありましたので、その中から二つ、初めにお話をさせていただきます。

一つ目は断捨離についてです。

断捨離は、どなたにとっても必要なことだと改めて感じさせられました。私自身の反省になりますが、切羽詰まらないうちと整理整頓ができませんで、本がどんどん溜まってしまいます。

以前、猪瀬前理事長から、「知人の学校が火災に遭い、校舎を再建したい。その為に皆さんから本を寄付して頂き、資金に変えて再建費用に充てたい」とのお話があり、赤城の書斎にあった本をトラック一台分お渡ししました。本を手放したことで本棚がすっかり空き、非常にさっぱりとした気持ちになったのを覚えています。ところが、数年のうちにまた本がどんどん増えてしまいました。

シムックス1階の道場に、私が書いた本の参考図書をまとめた書棚があります。お時間のある方、まだご覧になっていない方は、ぜひ一度ご覧いただければ幸いです。だいたい一冊の本を書く為に、30冊程関連書籍に目を通すでしょうか。そのため、一冊書くたびに本がどんどん増えていくことになります。

最近では、新聞を読んだり、テレビを見たり、人様から何か連絡をいただいたりした時、この本を読みたいと思うと、つい後先を考えず本を買ってもらうようお願いしてしまいます。今は「アマゾン」という便利なサービスがあるので、読みたいと思った本がすぐ届きますから、本がどんどん溜まっていくばかりで、正直なところ本の扱いに困っています。

読まないままで本を処分するのは、なるべく避けたいと考えています。ですから自分の寿命と本の数が追いつかなくなっているような感覚を覚えます。やはり断捨離は何かしに迫られるような状況があつて初めて、実行できるものなのかもしれません。

二つ目は、若さについてお話しします。

昨晚、或る会合で、見た目にも若々しいと感じた後期高齢者の方々にお会いしました。私と同年令の方々が15人ほど集まったのですが、実に若々しいと感じる方、如何にも年

寄りだと思う方が半々でした。見た目に若々しい方々の秘密は何だろうと気になり、皆さんの話を聞いておりましたら、ある共通点が見えてきました。現在も仕事をしている方は、見た目にも若々しかったのです。

一方で年金生活を送っている方は、やはり高齢者だなあという印象を受けました。とはいえ、見た目に若々しい方々の中にも少しずつ違いがありました。実際に時間にとらわれず現役で働き続けている同世代の方々は、本当に若々しく見えました。若さの秘訣は現役にあり、と実感しました。

私の好きな論語

今回選んだテーマは、私自身が日頃から親しみを感じ馴染んでいるものをご紹介します。

① 子曰く、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず。

(為政第二・4)

子曰く、吾十有五にして学に志す

孔子は15歳の頃「学問で身を立てたい」と考え、それから真剣に学問に励んだといひます。幼い頃は母親や親戚の影響で葬儀のまねごとをして遊ぶことが多く、葬儀の作法には自然と詳しくなったとも伝えられています。15歳で学問に志すと決意した姿勢は、実に立派なものです。

現代でも早くから自分の進む道を明確に見定める若者は少なくありません。特にスポーツの分野ではその傾向が顕著で、たとえば野球選手の大谷翔平さんは、小学生の頃に「自分は将来、野球で世界一になる」と目標を細かく書き出していたことが、マスコミを通じて広く知られるようになりました。若いうちに明確な志を持つということは、いつの時代も重要であり、尊いことだと思います。

三十にして立つ

当時の社会的背景を考えると、三十歳になったら家庭を持ち、身を固めるべき年齢であることを意味しています。

四十にして惑わず

孔子の時代において、四十代になると官職に就き、社会的に責任ある立場を担うことが理想とされていました。孔子自身もその時期に「仕官」、つまり役所に仕える立場となり、国家に貢献する道を歩み始めます。

五十にして天命を知る

孔子は五十一歳で大司寇という最高裁判官のような役職に就きました。しかし、自分の思い通りには出来なかったわけです。失敗をし、五十六歳の時、自分の力が発揮できる国を探そうと放浪の旅に出ます。

現代に置き換えるなら、「日本で大臣になったけれど、思うような改革ができなかった。では海外に行ってみよう。自分の力を発揮できる国があるのではないか。」そんな心境かもしれません。

十三年にわたって諸国を回ったけれども、自分を採用してくれる国はなく、諦めて故郷に帰ったのが六十九歳です。しかしながら、その間にも孔子の名声はどんどん広がって行きました。

六十にして耳順う

六十代になると、人の言うことに素直に耳を傾けるようになる。

私も二十代・三十代は、人の話を聞いて間違っていると思ったなら、直ぐに弾けました。今は随分変わったものだと思います。人の話を素直に穏やかに聞くことが出来るのは、やはり六十代でしょう。

七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず

自分のやりたいことを、やりたいよう自由に行っても、道を外れることはない。つまり、社会のルールを逸脱せず、他人に迷惑をかけることもない、という境地を指しています。このような成熟した自由を得るに至った孔子自身は、74歳でその生涯を終えました。

この章句は大変有名です。孔子が晩年に自分の人生を振り返って、こう述べているわけです。その言葉に共感し、憧れる人が大勢いるということでしょう。渋澤栄一も孔子に憧れ、「孔子のようになりたい」と公言し、論語を自分自身の規矩準繩としていました。私もこの章句が気に入っていて、時々すらっと出て来るものですから、最初にご紹介しました。

② 曾子 曰く、吾 日に三たび吾身を省る。人の為に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。習わざるを伝えしか。

(学而第一・4)

「三たび」とは、日に三度という意味ではなく、何度も繰り返し自分自身を顧みるという意味です。私もこれを習慣にして、夜、眠る前にはその日一日を振り返るようにしています。

洪澤栄一の「三省」は有名です。洪澤栄一は夜寝る時、今日一日誰に会ってどういう話をしたか、どんな約束をしたかを思い出してから眠っていました。そうすることで、記憶としてしっかり残る。ですから久しぶりに会った人にも、いつ頃どんな話をしたかが思い出せるわけです。それが、世間で「洪沢老人の記憶術」と喧伝されています。

どうぞ皆さんも、我と我が身を顧みる時間を持つとよろしいと存じます。

人のために謀りて忠ならざるか

私たちは日々さまざまな人と約束を交わします。その約束を、果たすべきときに果たしているか、約束した内容について責任をもって確実に遂行しているか省みる。

「忠ならざるか」とは、表面的には人のために一生懸命尽くしたつもりでも、それが本当にその人のことを思っていたことなのか、打算的な意図が入っていないか、自分の心の内を省みなければならないという意味です。

朋友と交わりて信ならざるか

友人との関わりにおいて、自分は誠実な姿勢で向き合っていたかを省みる。相手の立場や思いを大切に、相手にとって良い関係であろうと努力する。そうした心構えがなければ、本当の意味での信頼関係は築けません。

こうした教えに基づき、洪澤栄一は一生懸命に努力を重ね、人としての誠実さを生涯にわたって大切にしました。

③子 曰く、三年学んで穀に至らざるは、得易からざるなり。

(泰伯第八・12)

「三年学ぶ」とは、長い年月をかけて学び続けるという意味です。

孔子は、弟子が自分のもとで一生懸命に学び、さまざまなことを身につけながらも、官職に就く意欲を持たないことを「得がたい人物である」と評価しました。

現代でも、大学や大学院で繰り返し学び、30代、40代になってもなお学びへの意欲を失わず、知的探求に打ち込む方がいます。そうした方々は、ひとたび社会に出れば、きっと大きな能力を発揮するはずです。

洪澤栄一もまた、こうした人材を見つけては、「この人は素晴らしい」と周囲に勧めていたと言われています。実際、『論語講義』には、具体的な人物やエピソードが数多く記録されています。

恒例の質問

○良い日がずっと続いていると思う方

○嘘はつかなかったし、嘘もつかれてないと思う方

嘘をつかれていないということは、誠実な方とお付き合いされている証拠です。嘘をつかれていることに気づかないまま過ごすのは、ある意味では幸せかもしれません。この人はまた嘘をついているのではないかと疑いながら話を聞くようになると、内容も興味深く感じられなくなってしまいます。

○ありがとうと言われ続けている方

○身体の手入れをよくやっていると思う方

先日、100年経営研究機構の後藤先生にお会いしました。後藤先生がご自身の身体の柔らかさが分かる写真を見せて下さったのですが、80歳を超す年齢とは思えない柔軟さで、こんなに柔らかい方がいらっしゃるのかと驚きました。ちなみに後藤先生は日々ヨガを実践されているそうです。

○自分磨きしていると思う方

○昨晚寝る時、今日はよくやったと思う方

そういう満足感を持って寝ると、翌日も良いことが沢山あると思って戴けると存じます。

令和7年を考える

備蓄米問題について 一判断の三原則で見ると

令和7年は、「乙巳（いつし・きのとみ）」です。この年は、変化と成長、そして新たな挑戦の年とされています。挑戦という言葉聞いてまず思い浮かべるのは、備蓄米の問題です。小泉進次郎さんにとっても、今年はまさに挑戦の年となっているようです。

備蓄米について、「判断の三原則」という視点から考えてみたいと思います。

一、本質で見る

そもそも、なぜ備蓄米の問題が起きたのでしょうか。その本質的な原因は、政府の対応の劣化にあると私は考えています。政府や中央官僚の質が著しく低下しており、その結果として米の供給不足が表面化し、更に備蓄米をめぐる混乱が生じてしまったのです。これは、政治の機能不全が生んだ問題であり、備蓄米騒動はその象徴とも言えるでしょう。これが「本質」の視点から見た私の考えです。

二、歴史で見る

お米の歴史を振り返ると、農業団体であるＪＡ（農協）と政府との間で常に綱引きがありました。そもそも備蓄米制度は、国民が飢えることのないように、食糧不足を回避するために設けられたものであり、その背後には強い歴史的な背景があります。

戦後の混乱期、あるいは江戸時代の米飢饉など、日本には「米が足りなくなる」という不安が常につきまといってきました。こうした歴史を踏まえると、今の制度には大きな問題があることが見えてきます。制度そのものが時代に合わなくなっているのです。

とくにＪＡの問題は深刻です。例えば、ＪＡが保有している建物の一部を資金不足の為、売却を検討しているという報道がありましたが、その売却先がＪＡの関連会社や子会社であるという点に大きな疑問を感じました。これは、天下りの温床であり、同じことを繰り返しているだけにしか見えません。

したがって、歴史的な視点から見ても、現在の備蓄米制度は根本的な解決策にはならないというのが私の考えです。

三、大局で見る

ここで小泉進次郎さんの出番です。前任の農林水産大臣が不本意な形で職を離れたため、後任には役者が必要だった。そうして登場したのが小泉進次郎さんです。

人間は目の前の問題をスムーズに処理すると、評価されるものです。現在、国民の多くはお米が高くて買えない、そもそもお米が手に入らないと不満を抱えています。こうした声を受けて、小泉さんは安くお米を国民に届ける仕組みを模索しています。

最近の報道では、ＪＡが農家に対して支払っていた概算金（仮払い）を廃止し、最初から買取制に変更するよう小泉さんが提案しました。それに対してＪＡも応じたことで、両者は合意に至りました。これは備蓄米問題の解決に向けた第一歩と言えるでしょう。

小泉さんはこうした目の前の問題を処理するだけでなく、次の手も既に考えているようです。より根本的な解決に向けて、水面下で様々な取り組みを進めているのではないかと感じています。

もし小泉さんがこの問題を根本から解決することができれば、小泉さんの評価は一層高まり、次期総理候補としての声も高まることでしょう。かつて、中曽根康弘さんが改革を進め総理の座に近づいたように、小泉さんにもその可能性があると思います。

ただ、目の前の問題を見るには大所高所に立って鳥の眼で見る必要があります。小泉さんはまだ大局観で判断していないなと私は感じます。

以上、備蓄米問題について「判断の三原則」で考えてみました。これは「令和の米騒動」として、今回の出来事は歴史に残る可能性があります。国民にとっては、お米が手に入らない、あるいは高すぎて買えないという現実が突きつけられているわけです。これを本当

に解決できるのか。それともできないまま推移してしまうのか——。今後起こり得る自然災害などを考慮すれば、備蓄米制度の見直しは待ったなしです。今こそ、本質を見抜き、歴史に学び、大局から判断する姿勢が求められていると強く感じています。

物価上昇と自給自足

今後、私たちの生活において避けて通れない問題の一つが、物価のさらなる上昇です。将来的に、様々な品目の価格が一気に跳ね上がる可能性があると感じています。

その背景の一つとして、アメリカのトランプ前大統領が導入した、いわゆるトランプ関税があります。この政策がさらにエスカレートすれば、世界経済の構造そのものが変わってしまうでしょう。実際に数十年続いてきたグローバリズムは終焉を迎えつつあり、今後はブロック経済の時代へと移行していくと考えます。トランプ氏は、そのグローバリズムにとどめを刺す役として登場した大統領であると、私は見ています。

これまでのように、遠く離れた国から高速輸送で食料を日本に届けたり、日本の製品を世界中に輸出したりしていたスタイルは、既に限界を迎えつつあります。遠い国から届く食料を美味しいと言って食べるという流れは、もはや過去のものとなっていくでしょう。

グローバリズムが終われば、究極的には地産地消の時代へと進みます。ただし、完全に国内だけで完結する経済は現実的に難しいため、今後は世界が5つから6つ程度の経済ブロックに分かれていくと予測されます。

こうした中、日本は非常に稀な国です。15年程前から一部の学者たちは、日本は国内で自給自足が可能な世界でも珍しい国であると指摘しています。

自給自足のすすめ

備蓄米の問題に限らず、これから私たちに求められる事は、自給自足という考え方です。以前からお話しているように、家庭でプランターを使って野菜を育てるといった取り組みが非常に有効です。その次は、フレコンバッグを使えば狭いスペースでも多くの作物を育てることが可能になります。更に家庭菜園を進めていけば、いずれは市民農園などへとステップアップすることもできるでしょう。

自分の食べ物は自分で作るという意識を持つことが、これからの時代には必要だと感じています。自分で作ることが難しい場合は、地域の農家の方とつながり、良好な関係を築くことも大切です。

今後の物価について

現在すでに物価の上昇は様々な分野に現れています。何度か申し上げていますが、例えばホテルの宿泊料金は、以前は9,000円程度で宿泊できていた部屋が今は20,000円を超える事もあります。これは一例に過ぎませんが、今後は食料品だけでなく、生活のあらゆる面で価格の上昇が進むことが予想されます。

急速なデジタル化と暮らしの変化

最近、アパホテルの新聞記事を見ました。チェックインの手続きが完全に非接触で行える機械が導入されているとのこと。現在、そのチェックイン機は683台設置されており、人の手を介さずにわずか20秒で手続きが完了し、すぐに部屋に向かえるということでした。これは驚くべきスピードです。今後はすべての宿泊施設でこうした自動チェックイン機能が標準になると考えられます。

しかしながら、こうしたシステムに慣れていない高齢の方々にとっては、ホテルの利用自体が難しくなってくると思います。使えない人はお客様ではないというような空気感が広がっているのも事実です。結果として、年配の方はホテルを利用し辛くなっています。

このような傾向はホテルだけではなく、少し規模の大きなレストランであれば、どこも同じような注文用の端末を導入しています。どんどん世の中は変化しています。

株主総会

近年、株主総会の様子は大きく変わってきています。特に目立つのは、株主が社長の退任を求める動きが増えてきたことです。いわば、経営者に対して非常に厳しい姿勢をとる株主が増えているのです。

その影響もあってか、最近では上場を取りやめる企業が増加しています。上場したままであると、外部の株主から経営に口を出されるリスクが高まるため、防衛策として非上場へと切り替える企業が目立つようになってきました。

私自身も会社を上場させようと考えた時期がありました。そのために株を複数の人に分配したこともあります。しかし最終的には、上場することで他社に買収されるリスクがあると判断し、その計画を断念しました。

現在では、以前程大きな規模でなくても、また利益がそれほど出ていなくても、比較的簡単に上場できる仕組みが整っています。その一方で、M&Aは今後ますます活発になると考えられます。仲介者を介さず、資金力のある企業が小規模な上場企業を次々と買収するような時代がすぐそこまで来ています。

これからの時代は、まさに「食うか、食われるか」が当たり前になるでしょう。資金力

を持った企業が、他の企業を次々と吸収していく構図が今後さらに加速すると考えられます。したがって、自分が経営している会社、自分が勤めている会社が「危ない」と感じたときには、2つの選択肢があります。

一つは、自分自身が資金力を蓄えて防衛力を高めること。もう一つは、資金力を持つ企業と良好な関係を築いておくことです。どちらにしても、企業が生き残るためには明確な戦略が必要な時代になりました。

「食うか食われるか」の時代は、一見過酷に見えるかもしれませんが、多くのチャンスにも満ちています。挑戦に次ぐ挑戦ができる残り半年間は、私にとって実にやりがいのある楽しい時期であると申し上げて、本日の講話を終了します。